①

ブレーメンのがくたい

村のおひゃくしょうの家の前で、にわとりが、朝の歌を歌っていました。そこへ、犬とねこが通りかかって、たずねました。

「元気な赤ぼうさん、何をそんなに大声で歌っているのですか。」

「朝が来たのを、村じゅうに知らせているのですよ。」

犬とねこは、にわとりの歌がたいへんじょうずなので、ほめました。ところが、にわとりは、急にしょんぼりしていいました。

「毎朝、人間たちのために歌ってきたこの歌も、きょうでおしまいです。」

犬とねこは、ふしぎに思って、わけをたずねました。

「あした、うちにお客さんが来ます。わたしは、お客さんにあげるごちそうにされてしまうのです。」

②

「なんということだ。」

犬が、おこっていいました。

「人間なんて、まったくひどいやつさ。まあ、ぼくの話も聞いておくれ。」

犬は、毎日、夜もねないで家の番をしたり、主人がかりに行くときは、いつもおともをしたりして、いっしょうけんめいはたらきました。ところが、けがをしてはたらけなくなると、うちを追い出されてしまったのです。

「わたしも、人間たちに、それはひどいめにあわされたのよ。」

③

と、ねこも、かなしそうにいいました。ねこは、ねずみを取るのがへたなので、うちの人からじゃまにされ、もう少しで川へすてられるところを、やっとにげだしてきたのです。

「みんなでいっしょに、ブレーメンの町へ行きましょう。」

そうだんが決まって、三びきは、町をめざして歩きだしました。

④

しばらく行くと、むこうから、ろばが来ました。

「おそろいで、どこへおでかけかね。」

ろばにきかれて、三びきは、今までのことを話しました。

「なかまに入れておくれ。じつは、このわたしも、うちをにげだしてきたんだ。」

⑤

ろばは、村一番の力もちで、こなならば十ふくろは、平気で一度に運びました。朝からばんまで、いっしょうけんめいはたらきつづけました。しかし、年をとって荷物を運べなくなると、むちでたたかれ、おまけに、食べ物もろくにもらえなくなったのです。

「ブレーメンの町で、がくたいをしよう。みんなで力を合わせれば、きっと人気者になれるよ。」

四ひきは、元気を出して、歌いながらでかけました。

大きな森にさしかかったとき、日がくれて、あたりは、だんだん暗くなりました。

⑥

「どこか、とまる所はないかな。」

気がつくと、むこうにあかりが見えました。森の中の一けん家のあかりでした。近づいて、中をのぞくと、テーブルの上に、おいしそうなごちそうが、山のようにおいてあります。

そのとき、がやがやと、話し声が聞こえました。この家に住むどろぼうたちが、帰ってきたのです。みんなは、急いでかくれました。どろぼうたちは、ぬすんだ品物をじまんしあいながら、さかもリを始めました。

「どろぼうたちを、びっくりさせてやろう。」

ろばの上に犬、犬の上にねこ、ねこの上ににわとりが乗ると、家の中へ向かって、四ひきは、大声で、いっせいにどなりました。

「ヒン、ワン、ニャーゴ、コケコッコー！」

どろぼうたちは大あわて、「おばけが出た！」と、ごちそうも品物もそのままにして、みんなにげだしてしまいました。

⑦

やがて、どろぼうたちは、こわごわも

どってきました。
「行って、ようすを見てこい。」
かしらのさしずで、どろぼうのひとりは、あかりのきえた家の中へ、そっとはいってきました。とたんに、ねこはとびついて、どろぼうの顔をひっかき、犬はかみつき、ろばは太い足でけり、にわとりは「コケッコー」と鳴きたてました。どろぼうは、あわててにげ帰り、かしらに、たいへんなまものがいると話しました。
「それはたいへんだ。どんなめにあうかわからない。それにげろ。」
どろぼうたちは、われ先ににげだして、それっきりもどってきませんでした。四ひきの動物たちは大よろこび、これからも力を合わせてくらしていこうと、やくそくしました。